

令和三年七月十日発行
皇學館論叢第五十四卷第二号 抜刷

万葉集卷十九・四一四四番歌「本郷思都追」訓考

井
口
日
奈

万葉集卷十九・四一四四番歌「本郷思都追」訓考

井口日奈

□ 要 旨

天平勝宝二（七五〇）年三月二日に作られた「見帰雁歌」（十九・四一四四、四一五五）は、第一首目に燕が来たことで、雁が北へ渡る時期に故郷を懐かしんで飛び行く姿が詠われる。故郷を懐かしむことがわかる第四句目「本郷思都追」は、旧訓では「くにおもひつゝ」と訓む。しかし、『古義』が、故郷を懐かしむ場合には「しのふ」の方が「おもふ」より感情が強いとの考えによって「しのひつゝ」と訓み改めて以降、注釈書の多くがこの訓みに従う。

しかし、二語は類似する語ではあるが、感情の強弱によって判断されることは他に例がない。そこで、集中の「思」「おもふ」「しのふ」のありようを確認し、故郷を懐かしむ歌を検討した。結果、二語には、景色を賞美する中で故郷を「しのふ」、思慕する対象として故郷を「おもふ」という違いがあった。この意味の違いと、作歌当日の背景からも、当該歌は、旧訓に「戻して「おもひつゝ」と訓むことが適切と考える。

□ キーワード

万葉集 大伴家持 越中 雁 思 おもふ しのふ

一、はじめに

帰雁を見る歌二首

燕来る 時になりぬと 雁がねは 本郷思都追 雲隠り鳴く(十九・四一四四)

春まけて かく帰るとも 秋風に もみたむ山を 越え来ざらめや 〔に云ふ、「春されば帰るこの雁」〕 (十九・四一四五)

万葉集の引用は『新編日本古典文学全集』に拠る。一部、私に改めた箇所がある。

右の歌は、天平勝宝二(七五〇)年三月二日に詠われた大伴家持の歌である。作品の題材である「燕」と「雁」の組み合わせは集中他になく、中国詩に由来することが指摘されている。⁽¹⁾そして、『万葉集』では雁の歌は秋のものがほとんどで、春の雁は当該歌を含め三首しか見つけることができない。小島憲之氏は「素材史上はなはだ注意すべきであり、同時にまた『歌』と『詩』との接点に位置する歌としても、貴重」であるという。

雁の秋に北からやって来て日本で冬を越し、春には北へ飛んで行く習性をもとに、第一首目(以下、当該歌)には北へ帰ってゆく春の雁の姿を、第二首目には次の秋にまた北から飛んでくるが詠われる。これは、中西進氏⁽³⁾が指摘するように「雁信」を意識した歌である。作歌当時、越中に国守として赴任して四年目の家持にとって、やってきた方角へと帰る雁の姿を自身の姿に重ねて「望郷の念」⁽⁴⁾を抱いたことで詠われたと考えられる。

その「望郷の念」にあたる第四句目「本郷思都追」の「思」は、訓みに「おもふ」「しのぶ」の二説ある。そもそも、「思」字は、『万葉集』の旧訓では全て「おもふ」と訓まれていたものを、契沖が「しのぶ」と訓むべきものがあることを指摘した。例えば、柿本人麻呂の明日香皇女挽歌において、皇女と同じ名前を持つ明日香川を皇女の形見として

大切にしよう」と詠う「思将往」(二・一九六)を、契沖は「思将往ハ、今按、思ハ徳ニテ、シノヒテユカムナルベシ」(『代匠記』(精撰本))として「思」を「しのふ」と訓み改めた。

こうした契沖の指摘以降、集中いくつかの「思」は「おもふ」から「しのふ」に訓み改められてきた。当該歌もその一つにあたる。古写本には「おもひつつ」「こひつつ」⁽⁵⁾と訓まれていたけれども、『古義』に「しぬひつつ」⁽⁶⁾と訓み改めて以降、現在まで多くの注釈書に「しのひつつ」と訓まれてきた。しかし、「おもひつつ」の訓みを採るいくつかの注釈書は「おもふ」と訓む根拠が示されており、検討の余地があると思われる。

そこで、本稿では当該歌第四句目「本郷思都追」の訓を論じてみたい。

二、諸説

当該歌は、第一、二句目「燕来る時になりぬ」と燕がやってくる季節(春)になったことで、雁が故郷へ鳴き飛んで行く姿を詠う。第四句目「本郷思都追」の「本郷」は、旧訓「ふるさと」と訓まれていたが、『略解』に「集中ふるさと、よめるは、すべて古京の地をいひて、吾家郷をふるさと、よめる事なし」として、
・ 我がやどに鳴きし雁がね雲の上に今夜鳴くなり国方可聞遊群(十・二二三〇、作者不明)
にあるように「くに」と訓んだ。近代以降の諸注釈書も従うところである。

「思都追」の訓は、次のように訓まれている。

A、おもひつつ

『拾穂抄』、『笥記』、『考』、『略解』、『総釈(森本健吉)』、『鴻巣』、『全釋』、『注釈』

B、しのひつつ⁽⁷⁾

『古義』、『日本古典全書』、窪田『評釈』、『全註釈』、佐佐木『評釈』、『私注』、『全集』、『集成』、『全注(青木生子)』、『新編全集』、『和歌文学大系』、『新大系』、『釈注』、『全歌講義』、『全解』、『岩波文庫』

C、両訓を記す

井上『新考』

A「おもひつつ」を採る『総釈』は、集中に「思」を「しのふ」と訓む歌があることを認めた上で「一般に思はオモフと訓んであるので、今も其に従つて置く」という。『注釈』は、「ここは『多頭我祢乃 可奈之伎与比波 久尔弊之於毛保由』(廿・四三九九)の例によりオモヒと訓む方が自然であらう」と、同じ家持作歌を挙げる。『注釈』が例に挙げた歌は天平勝宝七(七五五)年二月十九日、防人の身になりかわり作歌したものである。「クニ」(故郷)を「おもふ」と詠っていることから、同じ家持の歌である当該歌でも「おもふ」と訓むことが自然であるという。両訓を記すC井上『新考』にも、「ミレバミヤコノ大路オモホユの例によらば舊訓の如くオモフともよむべし」と、家持による歌(四一四二番歌)を例に挙げており、ここでも京(故郷)のものを「おもふ」と詠われている。

B「しのひつつ」と訓む注釈書のうち、『古義』には「こゝは、オモヒツ、とよみては、いとよろしからず」とある。『私注』も「思」はオモフでも悪くないが、シヌブの方が感が強くなるうか」とする。「感」というのは故郷の事を懐かしむ気持ちのことであろうか。Bでは、当該歌の第四句目を現代語訳する際に、「その本郷を恋しく思ひつつ(窪田『評釈』)、「故郷を偲んでは」(『全集』、『新編全集』)、「遠くの故郷を懐かしく思いながら」(『全注』)、「遠くの故郷を偲びながら」(『釈注』)というように故郷への憧憬が強く打ち出されている。

望郷の念を表現する際に「おもふ」を用いる歌がありながら、なお現在に至るまで「しのふ」が支持される理由と

しては、右のような、故郷へ向ける情意には「おもふ」より「しのふ」の方が気持ちが強く、当該歌に適當であるとの考えによるところが大きい。しかし、この二語の違いを情の強弱とすることは問題があると思われる。

三、「おもふ」と「しのふ」

『時代別国語大辞典上代編』には、次のように二語の意味を挙げる。(傍線部は筆者による)

おもふ「思・念・憶」思う。～ヲト思フ、と使うが、そのときどきの修飾語の内容によっていくつかの解釈に分けられる。①思う。②欲する。③心配する。氣にやむ。おもんばかり。④なつかしむ。恋しいと思う。⑤予想する。推量する。⑥氣が合う。親しむ。

しのふ「思」①慕う。偲ぶ。何かの縁に触れて身近にないものことに思いをはせる。②賞美する。

【考】思フとシノフは意味に近いが、思フが思考一般を意味するのに対して、シノフはある対象に惹きつけられる心を示す、という差があるようである。

傍線部はそれぞれの語句の意味の内、当該歌に当てはまると考えられるものである。二語の持つ意味の内、類似する箇所である。【考】に二語の違いを述べているが、これによって判別できる基準であるとは言い切れないだろう。「おもふ」が心に関する諸々の思考を意味するのに対して、「しのふ」は対象への好意という思考の中の狭義を担うというだけであって、「対象に惹きつけられる心」が「おもふ」に無いとは言い切れないからである。はやくから澤瀉久孝氏¹⁰⁾は二語の違いを次のように説く。

即ち「おもふ」といふ語は、広くある事を思ひ、或は常にある人を思ふといふような場合に用ゐられるに對して、

「思ふ」といふ語は、ある機に触れ、ある縁に接して、意中の人や情景を思ひやるやうな場合に用ゐられる事が多い。

氏は「機・縁」によつて「しのふ」ことが引き起こされるといふ。氏のこの態度は徹底しており、氏が著す『注釈』では「機・縁」のない「思」を「しのふ」と訓むことを避けている。⁽¹¹⁾「しのふ」が恒常的な情意ではなく、思い出す場合に用いられることは、内田賢徳氏も指摘する。⁽¹²⁾

「思ふ」は思うことを意義にもち、その対象は不在の、あるいは失われたものではあつても、「思ふ」や「思ほゆ」が未知のものや不可視のものをも対象にするのに対して、狭く、既知の可視的なものを、どちらかと言えば想起するといったような意義である。

「しのふ」が、何かをきつかけにして思い出す意味において「おもふ」より優位であることは、粟が子どもに似ていることから粟を食べれば子どもを思い出すと詠う、

・ 瓜食めばこどもおもほゆ胡藤母意母保由 粟食めばましてしぬはゆ麻斯提斯農波由……（五・八〇二、山上憶良）
の歌に確かめられる。

けれども、これは物を見て似ている対象を「思い出す」意味での使用であり、諸注釈書が指摘する懐かしさを意味する「おもふ」と「しのふ」の情の強弱とはいえないのではないか。また、右の歌は対象が「人」であり、当該歌のような「故郷」へ向けたなつかしさを表すものと同列に扱うことにも問題はあるだろう。

そもそも、普通には「おもふ」と訓む「思」を「しのふ」として用いた場合には、その「思」を「しのふ」と訓む共通した理解があると考えられる。それを明らかにするためには、集中の「思（しのふ）」を挙げて訓みの依拠するところを求めねばならない。そして、依拠するところが、当該歌が訓み改められる理由となった情の強弱でなかった

場合には、故郷を「しのぶ」ことと「おもふ」ことの違いを明らかにして適当な訓みを考える必要がある。

四、万葉集の「しのぶ」

(一)「しのぶ」用例数

集中の「しのぶ」の巻ごとの用例数を〈表1〉にあげる。()内の数字は、家持の用例数である。

〈表1〉「しのぶ」用例数

巻	「偲」	「思」	仮名書
一	1	1	2
二	2	1	2
三	1	2(1)	3(1)
四	0	0	1
五	0	0	1
六	2	1	1
七	5	1	2
八	0	2(1)	2(1)
九	2	1	1
十	2	1	1
十一	2	1	0
十二	4	1	0
十三	4	3	0
十四	0	0	7
十五	0	0	3
十六	0	1	2
十七	0	0	4(4)
十八	0	0	3(3)
十九	0	1(1)	11(10)
二十	0	0	11(2)
合計	25	17	57

塙書房刊『万葉集電子総索引』CD-ROM版古典索引刊行会編 参照

〔表1〕をみると、集中「しのふ」九九例の表記は、仮名書き五七例、「偲」二五例、「思」一七例である。現在一般的に用いられている「偲」表記は、集中では初期に多く用いられ、だんだんと使用を避ける傾向がみられる。そもそも「偲」字は中国では「偲、彊力也」（『説文』）「偲、多才力也」（『正字通』）とあるように「強い」「かしこい」という意味であり、前述した日本語「しのふ」の意味は持たない。乾善彦氏は、¹³⁾「しのふ」に「偲」をあてることが万葉初期の歌人である人麻呂周辺で用いられていたけれども、万葉後期の時代である家持周辺では見られなくなったとして、「偲」は漢字本来の意義としては『しのふ』に対応しないという認識が当時の人々にもあり、それがこの対応を定着させることなく排除させるに至らしめた」と指摘する。

巻ごとの表記は、巻八や巻十三では約半数を「思」が占める。しかし、当該歌を含む末四巻に限れば、「しのふ」は当該歌以外すべて仮名書き表記である。末四巻において「しのふ」を用いる際には仮名書きで表記することが優勢であったことが窺えよう。その中において「しのふ」と訓み改めた当該歌の「思」は、末四巻の「しのふ」の中で異例といえる表記といえる。なおのこと、「しのふ」と訓む根拠が求められるのである。

（二）「おもふ」から「しのふ」に訓み改められた歌

〔表1〕「思」一七例の内、当該歌を除いた二六例は前述したように旧訓では全て「おもふ」と訓み、契沖以降に「しのふ」と訓み改められたものである。これらは、現状、おおよその注釈書において「しのふ」と訓まれている¹⁴⁾。歌を挙げ、その根拠を見ていくことにしよう。

- a 巨勢山のつらつら椿つらつらに見乍思奈巨勢の春野を（一・五四、坂門人足）
みつしのはな
- b ……音のみも名のみも絶えず 天地のいや遠長く 思将往御名にかかせる 明日香川万代までに はしきやし我
しのひをかむ

が大君の 形見にここを (二・一九六、柿本人麻呂)

c 越の海の手結が浦を旅にして見ればともしみ日本思櫃 (三・三六七、笠金村)

d 秋さらば見乍思跡妹が植ゑしやどのなでしこ咲きにけるかも (三・四六四、大伴家持)

e 後れにし人乎思久思泥の崎木綿取り垂でて幸くとそ思ふ (六・一〇三一、丹比屋主)

f 住吉の岸に家もが沖に辺に寄する白波見乍将思 (七・一一五〇、作者不明)

g あしひきの山ほととぎす汝が鳴けば家なる妹し常所思 (八・一四六九、沙弥)

h ……そこ故に心なくやと 高円の山にも野にも 打ち行きて遊びあるけど 花のみにほひてあれば 見るごとに

益而所思 (ましてしのはめ) いかにして忘るるものそ 恋といふものを (八・一六二九、大伴家持)

i 絶等寸の山の尾の上の桜花咲かむ春へは君之将思 (九・一七七六、播磨娘子)

j 風に散る花橋を袖に受けて君がみ跡と思鶴鴨 (十・一九六六、作者不明)

k 朝柏潤八川辺の篠の目の思而宿者夢に見えけり (十一・二七五四、作者不明)

l 浦廻漕ぐ熊野船着きめづらしく懸不思月も日もなし (十二・三二七二、作者不明)

m せむすべのたづきを知らに 岩が根のこころしき道を 石床の根延へる門を 朝には出で居て嘆き 夕には入居而思

白たへの我が衣手を 折り返しひとりし寝れば…… (十三・三三二七四、作者不明)

n み吉野の真木立つ山に 青く生ふる山菅の根の ねもころに我が思ふ君は 大君の任けのまにまに

鄙離る国治めにと 群鳥の朝立ち去なば 後れたる我か恋ひむな 旅なれば君可將思…… (十三・三三二九一、作者不明)

o ……行く道のたづきを知らに 思へども験をなみ 嘆けども輿かをなみ 大御袖行き触れし松を 言問はぬ木に

はありとも あらたまの立つ月ごとに 天の原振り放け見つつ 玉だすき懸か而思名 恐おそくありとも (十三・三三二四、作者不明)

P 志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすかの山と見管將思みつしのほむ (十六・三八六二、白水郎)

「しのふ」の持つ「賞美」する意味は、「おもふ」にはなく「しのふ」だけが持つことから、「思」に賞美の意味があれば、「しのふ」と訓むほうが適切である。右の中では、aは、冬に巨勢山の椿を見ながら、巨勢山の春の風景に思いをはせて賞美しようという歌である。『古義』に「ミツツシヌハナと訓べし、(略)シヌハナは、將む二賞愛メデシヌハ一といふ意を急に謂へるなり」として「しのふ」と訓み改められた。dは、亡妾悲傷歌の中の歌で、秋になったら庭のなでしこを見て賞美しろ、または、花を見てそれを植えた自分(妾)を思い出せ、という歌。『童蒙抄』に「見つ、偲べと、なでしこの咲きたるにつけて、亡妻をしのべと瞿麥の咲きにけるかなと詠める歌也」、『考』に「只見つ、愛したふ事を云」とある。どちらの意味に採っても、「しのふ」の意味に当てはまる。fは、白波を賞美する「思」であるから、『代匠記』(精撰本)に「落句ハ、ケニモ思ハ偲ニテ、ミツ、シノハムニテ有ヌヘキ所ナリ。」とある。

澤瀉氏のいう「機・縁」に接して、そこにいない対象を思い出す時に「しのふ」が多く用いられており、その場合、歌の中に「機・縁」と対象がはっきりと詠われていることが多い。bは、明日香皇女挽歌である。皇女と同じ名前の明日香川を皇女の形見として大切に賞美しようというので、ここの「思」は、川をみながら皇女に思いをはせる意味を持つ。眼前の景色を機縁として人の面影を求めることになるから、『代匠記』(精撰本)は「思將往ハ、今按、思ハ偲ニテ、シノヒテユカムナルベシ」とする¹⁵⁾gは、『童蒙抄』以降「しのふ」と訓まれている。ほととぎすの鳴き声を機縁として、鳴き声を聞く度に妻のことが思い出される、という。hは、家持から妻の大嬢へ送られた歌である。『古義』に「山にも野にも、なつかしげに、花のみにほひてあれば、見るにつけて、ますく妹がおもはるゝ」として、

花を機縁にして妻を思い出すために「しのふ」と訓み改められた。iは「是を今本におもわんと訓るは誤なり」(『考』)、jは「シヌヒツルカモとよむべし」(『古義』)として、訓み改めた。根拠は述べられていないが、それぞれ「桜花」「花橘」を機縁として「君」に思いをはせている構造を持ち、「おもふ」より「しのふ」が適切と考えられたのだろう。mは『考』によって「しのふ」と訓まれた。「朝には一夕には」という構文は集中九例あるが、「しのふ」が詠われているのは他に「我妹子とさ寝し妻屋に 朝には出立俣 夕には入り居嘆かひ」(三・四八二)のみである。『全注』(曾倉岑)はこの歌との冒頭十句の類似を指摘する。nは、旅先で夫は私のことを思い出して恋しく思うかという箇所「思」が用いられており、『考』以降「しのふ」と訓まれている。旅立つ相手に自分のことを恋しく思っている場合には、

・ み越路の雪降る山を越えむ日は留まれる我を懸かけてしの而小竹葉背はせ(九・一七八六、笠金村歌集)

・ 愛しと思ひし思はば下紐に結ひ付け持ちて夜麻受やまぞ之努波世しのはせ(十五・三七六六、中臣宅守)

・ 我が妹子が志濃しぬ非尔西餘等ひにせよと付けし紐糸ひいとになるとも我は解かじとよ(二十・四四〇五、防人)

のように「しのふ」を用いることが一般的であり、nも「おもふ」より「しのふ」と訓むことが適当と考えられる。oは、『古義』に「玉手次云々は、二ノ巻に、作良志之香來山之宮、萬代爾過ツクラシシカツヤ卒登念哉アノゴトヲアサガキツ、玉手次懸タマテノツギ而將俣ケテスルム、恐有騰文カシコカレドモとあるに同じ」とある。同じ挽歌であるbと同様に、形見である物を機縁として死者を思い出す構造を持つ。pは、原文「思」に「俣」の異同があるため古写本に「しのふ」とも訓まれていた。今、「思」より「俣」の字を探り「しのふ」と訓む注釈書が多いのは、一首を「荒雄が世に在しほど、常に見遣てなくさみし山なれば、其ノ山を所縁ある處と思ひ定めて、吾も常に見やりて、亡人のかたみに、慕ひつゝ、あらぬと思ふぞ」(『古義』)の歌意とした時に、bの構造と類似するからであろう。

右のように「しのふ」の意味を根拠としない例は、語句の掛かり方や、長歌を参照して訓み改められている。eは、序詞の中に「思」がある。『童蒙抄』に「おもはくとはよむべからず。下にしでのさきとよめればそのうつりに、しのばくとよみたり。しのばくにあらねば、歌の意も不レ通也。」とあるように、「思泥の崎」に掛かるように「思」は「しのふ」と訓む。kは、序詞によつて導かれた「思」であり、『考』の「此思はしぬぶとよまでは上よりつゝかず、下の意もきこえさる也」による。cは、行幸時の歌で、長歌に「ますらをの手結が浦に 海人娘子塩焼く煙 草枕旅にしあれば ひとりして見る駿なみ 海神の手に卷かしたる 玉だすき懸かけて而の之の努ひつ權 大和島根を」とあるので、『代匠記』（精撰本）は「思權ハ、今按、思ハ思ニ（テ）シノヒツナルヘシ。長哥ノカケテシノヒツ、コレヲ反シテ云ヘリ」として「しのふ」と訓み改めた。lは、現在でも訓みのわかる歌ではあるが、『新編全集』に「カケテはシノフにかかるのが例」とあるように、集中「かけて」や「見つつ」は「しのふ」に目立って付随する語である。

このように、「しのふ」に訓み改められた「思」には、それぞれに「しのふ」の意味や類例が根拠となっていることがわかった。旧訓「おもふ」から「しのふ」に改めたのも、「おもふ」では歌の内容を表現するのに不十分だと考えられたからであろう。

「思」の訓みを右のように集中の歌や語句の意味と照らし合わせて改めたとすれば、当該歌の「思」の訓みを考慮するときに「感の強さ」に依拠したことは、適切な目安ではないとみてよい。まずは、当該歌と同じように故郷を「しのふ」歌から故郷を「しのふ」こととはどういったことなのかを明らかにして、故郷を「おもふ」場合と比べてみたい。

(三) 故郷を「しのふ」

当該歌は、三、四、五句目に雁が故郷を「思」ながら鳴く姿が詠われる。集中、故郷（ここでは「国」「里」「京」「家」

を含む)へ望郷の念を抱いた時に「しのふ」と詠う歌は四例である。異郷で使用されることが多い「しのふ」に故郷を「しのふ」歌が少ないことは、遠く離れた「人(女、男、子ども、故人等)」に向けられる語句であることが考えられる。その中で郷里に向けて「しのふ」歌四例には、郷里にいる「人」に関わる特徴がみられる。⁽¹⁸⁾

① 大伴の高師の浜の松が根を枕き寝れど家之所^{いへ}_{しのは}由^ゆ(一・六六、置始東人)⁽¹⁹⁾

② 越の海の角鹿の浜ゆ 大船に真梶貫き下ろし いさなとり海路に出でて あへきつつ我が漕ぎ行けば ますらを

の手結が浦に 海人娘子塩焼く煙 草枕旅にしあれば ひとりして見る驗なみ 海神の手に卷かしたる 玉だす
き懸^{かけて}而^{して}之^の努^{ひつ}櫃^{ひつ} 大和島根を(三・三六六、笠金村)

③ 越の海の手結が浦を旅にして見れば羨しみ日本思櫃^{やまとしのひつ}(三・三六七、笠金村)

④ 印南野の浅茅押しなべさ寝る夜の日長くしあれば家之小篠生^{いへしのはゆ}(六・九四〇、山部赤人)

①は、行幸時の歌である。松原の風光明媚な土地で夜を過ごすけれども、家のことが偲ばれる、という。⁽²⁰⁾④も行幸歌であり、印南野の景勝を讃えた長歌の反歌である。①④では一人寝の際に「しのふ」ことから共寝の相手が居る「家」を「しのふ」と詠う。②③も①と同じように、眼前の風景に感動したことをきっかけにして故郷を偲ぶことを詠っている。②は、手結の浦の景を旅先なので「ひとりして見る驗なみ」と一人で見なければならぬことを惜しんで「大和島根」を偲ぶ。これは、共に景色を見る相手を求めているのである。②の反歌③も同様に、手結の浦に一人居て「佳景を家人とともに見ないのが甲斐もないこと」と思い、そこが引金となって、家郷の大和を偲ぶ」(『全注(西宮一民)』)という。これらは、「人」がいななことをさびしく思う状況を、澤瀉氏のいうところの「機・縁」にして思慕するということ構造が共通する。故郷に残した相手へ「しのふ」ことは、相手が居ないことを自覚したときに引き起こされるのである。また、その機縁の背景に、旅先の景勝を引き合いに出していることも特徴として挙げられよう。

このような景勝を前にして心晴れやかになるほど故郷のことを思うという構造は、「おもふ」にはなく「しのふ」にのみみられる。これは、対象を眼前の景色に重ねて遠く離れた対象に心を寄せるという「しのふ」の基本的な構造をもつ歌、

・ 秋萩の上に白露置くごとに見管曾思怒布君が姿を（十・二二五九、作者不明）

・ 山吹の花取り持ちてつれもなく離れにし妹を之努比都流可毛（十九・四一八四、大伴家持妹）

のように離れた対象を身近なものに投影して心を慰めることと同じであろう。たんに思い出しただけでなく、対象を自分の近くに感じたい、対象とともにありたいという思いもあるのが「しのふ」である。旅先にあつては、「しのふ」対象に「今この場にてほしい」というような、自己を中心にして使用されていると考えられる。

五、万葉集の「おもふ」

（一）「おもふ」用例数

集中の「おもふ」についても確かめておく。巻ごとの用例数を（表2）にあげる。「念」「思」行と巻十九列の（一）内の数字は、家持の用例数である。

集中「おもふ」の用例は九七二例ある。（表2）をみると、表記は「念」が一番多く五五九例、仮名書き二〇九例、「思」一九六例、他に「憶」や「想」が少数だがみられる。巻別では「思」と「念」とが同じ程度の用例数である巻十三、十六と仮名書き主体表記の巻を除いて、ほとんどの巻で「おもふ」には「念」を用いる。末四巻では主に仮名書きによって表記されているが、当該歌を含む巻十九の表記は他の巻と異なる訓字主体であるため、巻十九のみ「思」

「念」の用例が多い。末四巻の「思」表記六例「思出」^{オモヒデ}（十七・三九六九）「思標之」^{オモヒシメシ}（十九・四一五二）「思延」^{オモヒヒク}（十九・四一五四）「繁思」^{シゲキオモヒ}（十九・四一八七）「思恋」^{オモヒコトヒ}（十九・四二二四）「思共」^{オモヒトナ}（十九・四二八四）には、訓みの揺れはなくすべて「おもふ」として訓まれている。

〈表1〉と合わせて考えると、末四巻の「思」の中で訓みの揺れが認められるのは当該歌のみということになる。

〈表2〉「おもふ」用例数

巻	「念」	「思」	仮名書	その他
一	13	2	1	0
二	40	7	0	1（憶）
三	30(1)	15(2)	0	0
四	92(21)	19(3)	1	1（憶）
五	0	3	18	0
六	24(4)	5	1	1（憶）
七	34	11	0	1（想）
八	30(8)	5(1)	0	0
九	13	8	0	0
十	48	16	1	0
十一	101	35	1	0
十二	76	20	0	3（想・憶）
十三	21	38	0	0
十四	0	0	30	0
十五	0	0	55	0
十六	7	6	1	1（憶）
十七	6(3)	1(1)	41	0
十八	0	0	23	0
十九	24(15)	5(4)	5(3)	0
二十	0	0	31	0
合計	559	196	209	8

塙書房刊『万葉集電子総索引』CD-ROM版古典索引刊行会編 参照

(二) 故郷を「おもふ」

次に、故郷を「おもふ」歌二二例を見ていく。これらは、「おもふ」の意味によって二つに分けられる。

A、思い出す

- ① 葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は倭之所念(やまとしおもほゆ) (一・六四、志貴皇子)
 - ② 藤波の花は盛りになりにけり奈良の都を御念八君(おもほすやきみ) (三・三三〇、大伴四綱)
 - ③ 梅の花折りかざしつ諸人の遊ぶを見れば弥夜古之叙毛布(みやこしぞもふ) (五・八四三、土師水通)
 - ④ 若の浦に白波立ちて沖つ風寒き夕は山跡之所念(やまとしおもほゆ) (七・二二九、藤原房前)
 - ⑤ 石走る滝もどろに鳴く蟬の声をし聞けば京師之於毛保由(みやこしおもほゆ) (十五・三六一七、大石菴麻呂)
 - ⑥ 春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大路所念(おおちしおもほゆ) (十九・四二四二、大伴家持)
 - ⑦ ……春霞島廻に立ちて 鶴がねの悲しく鳴けば はろばろに伊弊乎於毛比涅(いへをおもひで) 負ひ征箭のそよと鳴るまで 嘆き
つるかも (二十・四三九八、大伴家持)
 - ⑧ 海原に霞たなびき鶴が音の悲しき夕は久尔弊之於毛保由(くくにへしおもほゆ) (二十・四三九九、大伴家持)
- B、なつかしむ、恋しいと思う
- ① やすみしし我が大君の敷きませる国の中には京師所念(みやこしおもほゆ) (三・三二九、大伴四綱)
 - ② 浅茅原つばらつばらに物思へば古りにし里し所念可聞(おもほゆるかも) (三・三三三、大伴旅人)
 - ③ 思家登心進むな風まもりよくしていませ荒しその道(いへおもむか) (三・三八一、筑紫娘子・兒島)
 - ④ 玉藻刈る辛荷の島に鳥廻する鶺にしもあれや家不念有六(いへおもほざらむ) (六・九四三、山部赤人)
 - ⑤ さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思哉毛君(おもふやもきみ) (六・九五五、石川足人)

- ⑥ 故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに念曾吾世思おもひそあがせし（六・一〇三八、高丘河内）
- ⑦ 高島の阿渡白波は騒けども吾家思慮われはいおもふり悲しみ（七・一二三八、古歌集）
- ⑧ 然とあらぬ五百代小田を刈り乱り田廬あはれいへおもふに居れば京師所念みやじおもほ（八・一五九二、坂上郎女）
- ⑨ 高島の阿渡川波は騒けども吾家思宿われはいへおもふり悲しみ（九・一六九〇、柿本人麻呂歌集）
- ⑩ 淡路島門渡る船の梶間にも我は忘れず伊弊乎いへせし之曾於毛布せおもふ（十七・三八九四、作者不審）
- ⑪ たまはやす武庫の渡りに天伝ふ日の暮れ行けば家乎いへ之曾於毛布せおもふ（十七・三八九五、作者不審）
- ⑫ 香島より熊来をさして漕ぐ船の梶取る間なく京師みやじ之於母倍由しおもほゆ（十七・四〇二七、大伴家持）
- ⑬ 朝開き入江漕ぐなる梶の音のつばらつばらに吾家わが之於母保由しおもほゆ（十八・四〇六五、山上臣）
- ⑭ 伊弊いへ於毛布おもふ等眠を寝ず居れば鶴が鳴く葦辺も見えず春の霞に（二十・四四〇〇、大伴家持）
- Aは、故郷を思い出した時に「おもふ」を用いる。「しのふ」が対象の不在によつて故郷を想起し、思慕を引き起こしていたのとは異なり、「おもふ」は眼前の事象を起点として類似する故郷を想起する構造を持つ。もちろん、そこに思い出したことに伴う情緒は含まれる。②③⑤⑥は、それぞれ②「藤波の花」③「梅の花折りかざしつ諸人の遊ぶ」⑤「鳴く蟬」⑥「萌れる柳」を見たり聞いたりしたことで京での同じ景色を思い出す。①④⑦⑧は、眼前の景色がもつ寂寥感と遠く離れた故郷を思う気持ちとが同調したことで、故郷を思い出す構造を持っている。
- Bは、故郷への好意を「おもふ」と表現する歌である。赴任や旅によつて故郷から遠く離れた土地にいる時、①では一番心を占めるのは故郷のことだと詠い、⑦⑨⑩⑫には故郷のことを恋しく思わない時はないと詠う。⑪は⑩と対になっており、帰郷が一日延びたことでより強く故郷を恋しく思うことを詠う。⑭も、⑦⑧に鳥の鳴き声によつて故郷を思い出した後、恋しい気持ちを夜まで引きずっていることを「おもふ」と詠う。②は大伴旅人の歌で、前二首

に「我が盛りまたをちめやもほととに奈良の都を見ずかなりなむ」(三・三三二)「我が命も常にあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため」(三・三三三)と京や若い時に過した明日香に思いをはせており、②ではそれらを振り返り、物思いにふけると、故郷のことを慕わしく思うと詠う。⑤は大伴旅人に向けた歌で、大宮人が自分の家のように住んでいる大和の佐保山を恋しく思っではないかと尋ねている。また、④は家から遠く離れた場所に来た自分は同じ場所をめぐる鳥であったなら家を思わないだろうと家から離れたために恋しく思うことを詠い、⑥にも故郷から少しでも離れてしまうと恋しく思うという。こうした故郷への恋しさは、他者から見た場合には③に「おもふ」と表現されている。⑧は、坂上郎女の歌である。他の用例と異なり、自分の領地に居ながら、京の華々しさに心惹かれることを「おもふ」と詠う。これは、坂上郎女の活躍の場が京であったことを思えば、大宰府から京を思慕する①や自分の家のように佐保山を思う⑤、能登から京を思う家持の⑫と同じように考えられる。これら「おもふ」Bには、故郷は、帰る場所や価値のある場所として詠われている。それは、旅先にあつては、今いる場所からそちらへ行き(帰り)たいと心が向かうことであり、自身が故郷に引き寄せられる表現であるといえよう。

故郷を「しのふ」ことと「おもふ」ことの違いをみてきた。「しのふ」ことは、「しのふ」対象の不在を自覚する事象によって引き起こされ、対象のいる故郷を恋しく思うことであり、眼前の景に対象を重ねて慰撫する。それに対して、故郷を「おもふ」ことは、過去の類似する事象によって思い出すこと、愛着のある土地から離れたことでその土地へ引き寄せられる心や恋しいと思うことであるとの違いがあると確かめられる。

六、家持と雁と望郷の念

当該歌は、北へ向かう雁とそれを見る家持の視線によって成立している。問題とした第四句目「本郷思都追」とあるのも雁がこのように思いながら飛んでいる、と家持が見たからである。芳賀紀雄氏によると、この雁の擬人化表現は中国の詠物詩の影響をうけているという。鉄野昌弘氏は、初期の鳥の歌とは表現に格段の差があり、「詠物」が抒情の方法として習得されていたと評する。歌の発想は、井上『新考』、鴻巣『全釋』によれば、

・ 我がやどに鳴きし雁がね雲の上に今夜鳴くなり国へかも行く（十・二二三〇、作者不明）から得ているという。鈴木武晴氏は、

・ 妹があたり繁き雁が音夕霧に來鳴きて過ぎぬすべなきまでに（九・一七〇二、柿本人麻呂歌集）

・ 雲隠り雁鳴く時は秋山の黄葉片待つ時は過ぐれど（九・一七〇三、柿本人麻呂歌集）

・ 春草を馬昨山ゆ越え來なる雁の使ひは宿り過ぐなり（九・一七〇八、柿本人麻呂歌集）

の歌も念頭にあったという。これらの歌には雁の鳴き声に哀愁が伴うことを前提としている。こうした認識が、当該歌において、雁の声に望郷の念を伴わせて詠うことを可能にしたのだろう。

第一、二句目「燕來る時になりぬと」は佐佐木『評釈』によれば、

・ 時は今春になりぬとみ雪降る遠き山辺に霞たなびく（八・一四三九、中臣武良自）

・ 雁は來ぬ萩は散りぬとさ雄鹿の鳴くなる声もうらぶれにけり（十・二二四四、作者不明）

と似ている。燕の來る時期に雁が北へ向かうことは、家持自身も池主との書簡の中に取り入れている。

杪春余日媚景麗

初巳和風払自輕

来燕倚泥賀宇入

歸鴻引蘆迤赴瀛

聞君嘯侶新流曲

禊飲催爵泛河清

雖欲追尋良此宴

還知染懊脚跨野(十七・三九七六)

「杪春」は「晩春」、「初巳」は「三月三日」のことである。北国越中では氣候が遅れるから实景ではないにしろ、曆の上では、当該歌作歌日の三月二日は、北へ帰る雁を詠うのに適していることがわかる。

雁が行く先は「本郷」と表記され、北方を故郷として表現する。この表現からは、雁にとって北方が夏季に滞在する場所であると同時に本拠地であると思われていることがわかる。また、そうすることで、雁にとつて冬季に滞在中は旅先であり遠征地ということになる。こうして北方へ渡る雁は故郷へ帰る雁となり、以下に詠われる鳴き声に故郷への思慕が含まれていることが自然と理解される。

雁をこのように見做した家持はというと、この春も越中において京に帰ることはない。窪田『評釈』は、当該歌と同じ日に作歌した「おもふ」A⑥に詠う「京戀しい情」と同じく、「内心歸京を待つ心があつて、その心から、時が来た」として本郷に歸る雁が羨しく、自身の心を雁に移入したと指摘する。「思ひつつ」の「つつ」を「都追」と表記して「都を追う」と字をあてていることから、北方へ飛ぶ雁が帰る先に京を想定していることがうかがわれる。そして、雁をそのように見たとしたならば、京へ帰ることのない家持が雁に自身を重ねていたということになるのだろうか。

また、作歌日三月二日には、

A 二日、攀柳黛、思京師歌一首(十九・四一四二)

B 攀折堅香子草花歌一首(十九・四一四三)

C 見帰鷹歌二首（十九・四一四四、四一四五）

D 夜裏聞千鳥喧歌二首（十九・四一四六）

E 聞曉鳴鳩歌二首（十九・四一四七、四一四八）

F 遥聞沂江船人之唱歌一首（十九・四一四九）

の九首を作る。この内、A B Cにはそれぞれに京への関心が読み取れる。Aの歌「おもふ」A⑥では、柳を手にする
と柳で彩られた京の大路を思い出すと詠う。B「もののふの八十娘子らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花」（十九・
四一四三）の枕詞「もののふ」は「宮廷に関わる世界を思わせ、この初句は、前歌四一四二における官人、美女たち
のゆきかう都大路への憧れを引き継ぐ言葉ともみられよう」（『全注』）と指摘されるように、京を意識してのもので
ある。当該歌Cにも当然のことながら、A Bの気分を引き継いで京への思慕が詠われている。それは雁に仮託すると
いう形ではあるもの、家持自身の望京の念と考えて良いだろう。このようにいくつかの歌を連ねて望京の念を詠うの
は、前述した旅人の「おもふ」B②や、「おもふ」A⑦⑧「おもふ」B⑭にみられる。いずれも赴任先から何気ない
ことで京を思い出して郷愁にかられ、故郷をおもう歌である。

さて、当該歌の「思」の訓であるが、「おもふ」「しのふ」の用例からみると、歌の中に景勝もなく、故郷へ帰る事
だけが詠われていることから「おもふ」の訓みが適している。また、右のような情であるとすれば、現在多くの諸注
釈書に採られている「しのふ」よりも旧訓にもどして「おもふ」と訓む方が適切であろう。作歌日三月二日、京のこ
とを思い出した家持は京への郷愁にかられ、その思いを当該歌において雁に仮託することで表現した。このように作
歌背景を想定すると、雁の鳴き声に乗せられた情は作歌時の家持の情を移していることになる。それは、帰る時期だ
からと故郷を思い出したことに伴う情ではなく、日頃から胸中にある望京の念であるはずである。そうした「思」に

は、眼前の景に相手を重ねたり、思慕する対象の不在を自覚することが機縁となって思慕する情「しのふ」は適さない。愛着のある土地を離れた時から、その土地への愛情を胸に抱き続けることは「思」を「おもふ」と訓むことで表現されるのである。

七、おわりに

当該歌第四句目「本郷思都追」の「思」は、旧訓「おもふ」から「しのふ」に訓み改めた例の一つとされてきた。しかし、本稿で論じたように、集中の「おもふ」「しのふ」の用例や、故郷を「おもふ」「しのふ」歌の違いから、旧訓「おもふ」にもどして訓むことが適切であろう。当該歌第四句目を「くにおもひつつ」と訓み、一首全体を、

日頃から故郷を思う雁が、燕が来る時になったと、故郷を恋しく思う心を声に乗せながら、雲に隠れて鳴き渡つてゆく。

と解する。

当該歌を詠った同日、さきがけて作歌した「二日、攀柳黛、思京師歌」(十九・四一四二)「攀折堅香子草花歌」(十九・四一四三)はどちらも京を思い出させる内容であった。それによって、すでに京への望郷の念を抱いていた家持が、北方へ帰る雁に自身を仮託した歌を作った。その雁の鳴き声は、故郷へ帰ることの喜びや故郷を恋しく思う気持ちが伴っているのである。その気持ちは、春になったから故郷を思い出すといった突発的なものではなく、家持の心情と同じように、遠地へ来てから忘れることのない故郷への恋しさ懐かしさなのである。

【注】

- (1) 『代匠記』（精撰本）に「月令云。孟春之月、鴻雁來。仲春之月、是月也玄鳥至。注玄鳥燕也。」とある。
- (2) 小島憲之「春の雁」『日本古典文学大系 万葉集』（三）補論。
- (3) 中西進「大伴家持」第四卷（角川書店 平成七年）。
- (4) 『釈注』『和歌文学大系』。窪田空穂「評釈」には、「内心帰京を待つ心があつて、その心から、時が来たとして本郷に帰る雁が羨ましく、自身の心を雁に移入して云つてゐるものである。」とある。
- (5) 元暦校本、広瀬本
- (6) 「しぬふ」と訓むものは、「の」の仮名書「怒」「努」「弩」を、近世国学者が「ぬ」と訓んだことによる。橋本進吉（『国語学概論』岩波書店 昭和七年）以降、「の」に訓み改められた。
- (7) 「しのふ」と「しのぶ」の清濁の違いは近代にいたって明らかになったため、「しのびつつ」「しぬびつつ」を含める。
- (8) 『全集』頭注に「シノフは懐かしむ意」とある。
- (9) 「偲ふ」の語釈に「思慕する」とある。
- (10) 澤瀉久孝『萬葉古径』二「見つつ偲ばむ巨勢の春野を」（全国書房 昭和二十二年 初出昭和十六年）。
- (11) 後述する「おもふ」から「しのふ」に訓み改められた歌の中、『注釈』が「おもふ」と訓むものは当該歌と e h l j m n（j は該当句全体の訓みに異なるため、両訓を記している）である。
- (12) 内田賢徳『上代日本語表現と訓詁』第七節「動詞シノフの用法と訓詁」（塙書房 平成十七年九月 初出平成元年）。
- (13) 乾善彦『漢字による日本語記の史的研究』第五章三節「偏旁添加字―「偲（しのぶ）の場合―」（塙書房 平成十五年一月 初出平成元年）。
- (14) m n は、類似する用例が少ないため注釈書に訓みの揺れがある。また、e h l m n にも旧訓のまま「おもふ」と訓む注釈書

がある。しかし、述べたようにいずれも「しのふ」と訓む根拠を挙げることができるので、「しのふ」と訓むべきかと思う。
(15) 第四句目を「いへなるいもは」と訓むか、「いへなるいもし」と訓むかで、「思」の訓みが異なってくる。桜楓社は「いへなるいもはつねにしおもほゆ」と訓む。

(16) 古写本には「思」を採るものが多く、類聚古集にのみ「思」とある。

(17) 「見つつ」は八十六例中四十六例が心情表現とともに詠われており、その中で「しのふ」が三十例（内、「思」と仮名書きは二十五例）と多い。「おもふ」は、「もの思ひ」（三・二九六）「思ひわずらひ」（五・八九七）「思ひ」（八・一六二〇）「思ひ頼みて」（十三・三三三四）「思ひ延べ」（十九・四一五四、四一七七）といった語句で六例である。「かけて」も同様で、心情表現に続く用例十例全てが「しのふ」である。

(18) 佐佐木民夫『万葉集歌ことばの研究』Ⅱ「思慕・賞美の情と歌のことば」3「しのふ」（平成十六年二月 おうふう 初出昭和六十年三月）。

(19) 「思」は、冷泉家本、紀州本では「思」となっている。

(20) 第四句目「枕き寝れど」とある逆説表現と「しのふ」の関係は明らかになっていない。『新編日本古典文学全集』の頭注に、「第五句の「家し思はゆ」に続くには寝レバナなどその理由を示す表現があるべきところで、従来解釈に疑問が持たれている」とある。

(21) 芳賀紀雄『万葉集における中国文学の受容』Ⅰ「万葉集における中国文学の受容」、『万葉集における花鳥の擬人化―詠物詩との関連をめぐって』（塙書房 平成十五年十月 初出平成四年五月）。

(22) 鉄野昌弘『大伴家持「歌日誌」論考』第二章「詠物詩の方法―家持と書持―」（塙書房 平成十九年一月 初出平成九年）。

(23) 鈴木武晴「大伴家持の越中秀吟」（『都留文科大学大学院紀要』第二集 平成九年三月）。

（いぐち ひな・皇學館大学院生）